

3年次臨地実習前のトライアル客観的臨床能力試験（OSCE）の実施報告

■ 笹岡 晴香（教育研究部医療学系看護学部門） ■ 下元 理恵（教育研究部医療学系看護学部門）
■ 下田真梨子（元教育研究部医療学系看護学部門） ■ 森木 妙子（教育研究部医療学系看護学部門）

キーワード：客観的臨床能力試験（OSCE）、看護学生、臨地実習

I. はじめに

文部科学省の「看護学教育モデル・コア・カリキュラム（平成29年）」¹⁾では、看護系人材として求められる基本的な資質・能力の一つに「看護実践の基本となる専門基礎知識」が求められている。その内容は、課題解決技法の基本を踏まえ、看護の対象となる人のニーズに合わせた看護を展開実践する能力を育成することである。「看護教育の内容と方法に関する検討会（平成23年2月28日）報告書」²⁾によると、看護師教育の現状と課題のひとつに、「看護師教育においては、限られた時間の中で学ぶべき知識が多くなり、カリキュラムが過密になっている。そのため学生は主体的に思考して学ぶ余裕がなく、知識の習得はできたとしても、知識を活用する方法を習得できていないことがある」と報告されている。「看護職としての知識・技術・価値・信条・経験を複合的に用いて看護行為を起こす能力」と定義されている看護実践能力³⁾は、客観的な観察による評価が難しい。そこで、観察可能な看護実践能力の一つの評価方法として客観的臨床能力試験（以下、OSCE）がある。「OSCEは、認知領域（知識）だけでなく、精神運動領域（技能）および情意領域（態

度）の評価が可能であり、なかでも精神運動領域の評価方法として画期的な方法である」⁴⁾といわれている。

本学看護学科では、2020年度からの看護OSCEの導入に向けて、本年度は3年次の臨地実習前にトライアルOSCE実施に向けて、2018年度より委員会を立ち上げ取り組んだ。3年次トライアルOSCE実施の目的は、「臨地実習を前に、臨床現場に対応できる看護技術の習得状況を確認する」ことであった。副次的には、学生はOSCEに向けて復習をすることによって技術向上を図ることができ、また、フィードバックを受けることによって自己学習を促すことができる。教員は学生の実習到達レベルを把握することでき、教育の改善を図ることができる。そして、今回トライアルOSCEを実施するにあたり、模擬患者（以下、SP）として附属病院看護師の協力を依頼した。そのため、看護師は臨地実習指導者として臨地実習前の学生の学習到達レベルを把握することができる。以上の効果を期待するものである。

本稿では、トライアルOSCE実施後にアンケート調査を行い、学生および教員、SPへの学習効果と今後の課題について報告する。

II. 研究の目的・意義

本研究の目的は、トライアル OSCE 実施後の学生および教員、SP への学習効果と改善点を明らかにし、今後の OSCE 実施への示唆を得る。

III. 研究方法

1. 研究デザイン：アンケート調査

2. 研究対象者：本学看護学科の3年次学生60名、教員22名、SP10名

<トライアル OSCE の概要>

1) スケジュール：5月に附属病院看護部にトライアル OSCE の説明と協力依頼をするとともに、SP としての病棟看護師の協力和選出を依頼した。教員には6月に概要の説明を学科会議で行い、8月に OSCE シミュレーションを行いながら評価の実施しながら内容確認を2回行った。学生には7月に説明を行った。7月に決定した SP には概要説明を行い、3回の演技練習を行ない、そのうち2回は教員とともにシミュレーションを行った(表1)。

表1. トライアル OSCE のスケジュール

	教員	SP	学生
5月		看護部への説明と協力依頼	
6月	概要説明		
7月	評価方法等の説明	概要説明	試験説明
8月		演技練習1回目	
		演技練習2回目	
		演技練習3回目	
		OSCE 試験実施	
	学生へ個別評価		教員より個別評価を受ける

2) 内容

(1) 事例概要：70代の肺がん患者であり、化学療法施行後1週間目である。副作用で倦怠感と食欲低下、腹部膨満感を訴えている。前日から咳嗽と排痰があり眠れていない。本日はレントゲン検査予定が入っている。

(2) 場面設定：深夜勤務から申し送り終了後、患者の病室に行き、患者の状態を観察し、病棟から移動することを日勤リーダーに報告後、車椅子に移乗する。

(3) 実施する看護技術：バイタルサイン測定、フィジカルアセスメント(胸部、腹部)、コミュニケーション能力、車いす移乗

- 3) 実施方法：学生は朝、待機室に集合した。その後、呼び出された学生8名ずつが第2待機場所に移動し、そこで課題が記載された紙面を配布した。課題を受け取った学生は30分間で、事例や場面設定を把握し観察項目や試験時間の行動などの計画を立てるとともに準備されている物品の点検を行った。試験会場に入室後は、指定されたブースに行き、学籍番号と氏名の確認を受ける。試験では問診は SP に行い、フィジカルイグザミネーションはモデル人形に20分間で実施した。評価は学生1名に対して教員2名が評価表に基づいて行う。その後、学生は得られた情報をまとめて評価者に伝え、SP と評価者から学生に対してフィードバックを受けた(表2)。
- 4) 試験会場：看護学科実習室を使用して、8ブースを設置し、同時に8名の学生が受験できるようにした。

表2. トライアル OCSE 試験の流れ

【準備(30分)】 学生は待機場所で配布された課題内容の確認と使用物品の点検を行い、試験のための準備をする。
【入室・試験前確認(2分)】 評価者が受験者の確認をする。
【試験実施(20分)】 SPとモデル人形に対して課題を実施する。
【報告(5分)】 得られた情報をまとめて評価者に報告する。
【フィードバック(3分)】 SPと評価者は学生にフィードバックをする。
【退室】 試験会場を退室する。

3. 調査項目

1) 学生

トライアル OSCE 試験前の主体的な事前学習の取り組み状況や OSCE 実施後の臨地実習に向けての自信、学習意欲の変化など4項目と運用について10項目

2) SP

SP 経験の自分自身の臨床経験や学生への指導の影響などの4項目

3) 教員

学生の学習到達度把握の程度や運用についてなど13項目

4. データ収集方法

トライアル OSCE 終了後、学生には Web (Microsoft Forms) を用いてアンケート調査を実施した。教員および SP には紙面を用いてアンケート調査を実施した。

5. データ分析方法

アンケート調査の各項目について、Excel2016 を用いて単純集計を行った。

IV. 倫理的配慮

本研究は、高知大学医学部倫理委員会の承認を受けた (承認番号: 31-70)。研究対象者には、本研究の目的および方法、参加の自由意思の尊重と不参加でも不利益のないこと、研究結果は論文や学会などで発表することなどを文章と口頭で説明した。アンケートは無記名として匿名性を保障し、アンケートへの同意はチェックボックスを作成して意思を確認した。同意後の研究への同意撤回については、アンケート回収後は困難であることを文書にて説明した。得られたデータは、研究代表者が責任を持って保管し、研究終了後には速やかに処分することを説明した。これらに追加して、学生には研究への参加が成績には一切影響しないことを伝え、アンケートの入力には教員がいない場所で実施するように別室を設けた。

V. 結果

学生60名に配布し、56部回収した (回収率93%)。SP は10名に配布し、10部回収 (回収率100%)、教員は22名に配布し、16部回収した (回収率73%)。

1. 学生からみた効果と運用について

<トライアル OSCE に向けて事前学習の取り組み>は、「できた」「ややできた」と回答したのは約53.5%の学生が取り組んでいた。<トライアル OSCE 受験は有意義なものであった>については、「とても思う」「やや思う」と回答したのは約51.8%であった。<臨床実習に向けて意欲を高めることができた>かについ

ては、「できた」「ややできた」と回答したのは約69.6%の学生が意欲を高めることができていた。<臨床実習に向けて自信をもつことができた>かについては、「できた」「ややできた」と回答したのは25%の学生が自信につながっていた (図1)。

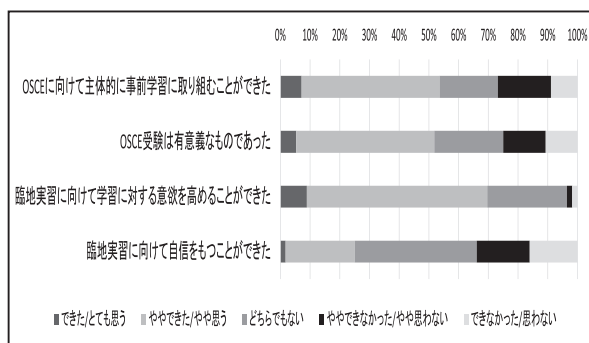


図1. 学生へのトライアル OSCE による効果

トライアル OSCE の運用で改善が必要な項目について、複数回答で回答が多かった項目順に、< OSCE に向けての練習環境 >が47名であり、次いで< OSCE の実施時期 >38名、< 説明会から OSCE までの期間 >34名、< 説明会での内容 >26名、< 試験の時間配分 >10名、< 試験内での結果の伝え方 > 8名であった (図2)。

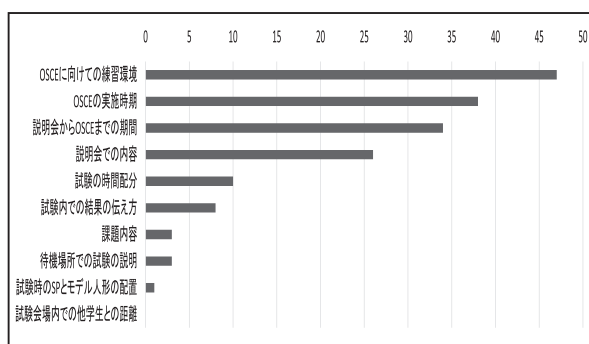


図2. 学生からみた改善が必要な点 (複数回答)

2. SP への効果について

SP は、< SP を体験してよかった >< 自分自身の臨床経験に役立つ >については、「とてもよかった」「まあまあよかった」と回答したのは100%であった。また、< 学生への指導に役立つ >についても、「とても思う」「やや思う」と回答したのも100%であった (図3)。

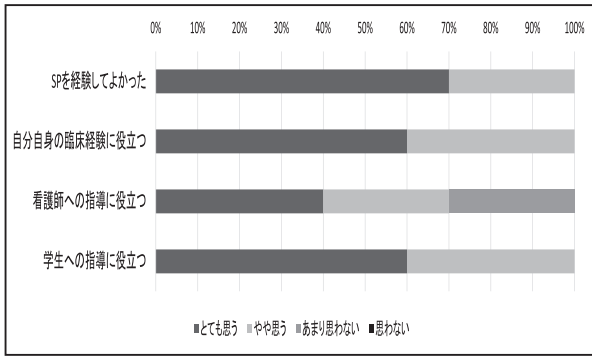


図3. SPへのトライアルOSCEによる効果

3. 教員からみた効果と運用について

教員は、学生の学習到達度把握の程度について、「できた」「どちらかというときできた」と回答したのは、<知識>では約81%、<フィジカルアセスメント>は87.5%、<車いす移乗>は62.5%、<コミュニケーション能力>は約81.3%であった（図4）。

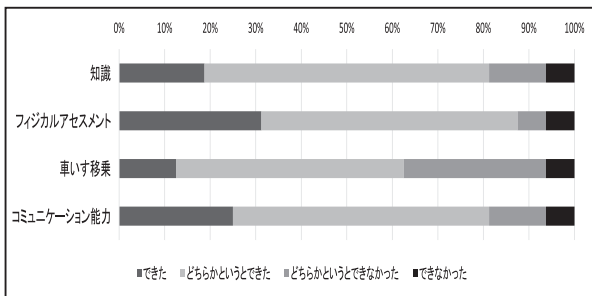


図4. 教員からみた学生の学習到達度把握の程度

また、教員から「適切でない」の回答が多かったのは、<OSCEの実施時期>が11名、次いで<評価項目><評価基準と概要評価の基準>が9名であった（図5）。

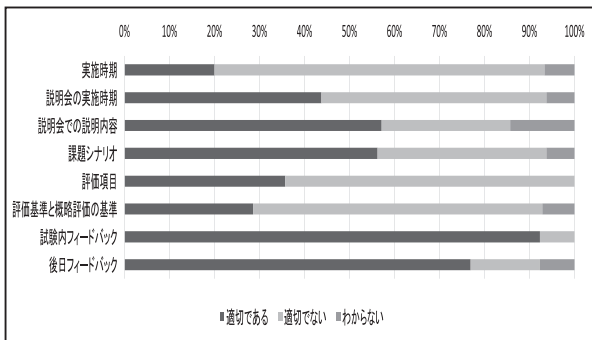


図5. 教員からみた改善が必要な点

V. 考察

1. OSCEによる学習効果

アンケート結果より50%以上の学生がOSCEに向けての事前学習やOSCEが有意義なものとなったと回答した反面、約25%が「できなかった」と回答した。これは、学生への説明会実施が前期試験直前であったことや、前期試験終了後からOSCE試験までの期間が短く、準備時間が十分とれなかったことが挙げられると考える。しかし、臨地実習に向けて学習意欲の向上につながった学生は約70%という結果であった。また教員は、評価者を通して<知識>や<フィジカルアセスメント>、<コミュニケーション能力>についての学習到達度について、80%以上が把握できたと回答している。本学看護学科の3年次トライアルOSCE実施の目的は、「臨地実習を前に、臨床現場に対応できる看護技術の習得状況を確認する」ことであった。今年度はトライアルではあったが、OSCEの目的を達成することができたと考え、またOSCEによって看護実践能力を評価する機会となったのではないと思われる。また、評価者のフィードバックだけではなく、臨床現場で実習指導者となり得るSPからのフィードバックは、学生にとって刺激となり、それが学びにつながったのではないかと考える。これは「他者からの指摘による自己への気づき」⁵⁾につながり、改めて自分の良さや課題に気づくことができたと考えられる。

SPは、OSCEに参加することによって、臨地実習前の学生の状況を知ることができ、それが自分自身の臨床経験や学生への指導に役立てられると感じており、<SPを経験してよかった>と回答していた。SPを経験したことによって、学生理解が深まり、臨地実習における指導の活用につながると思われる。

教員は、学生の学習到達度を把握することができたことによって、自己の講義や演習の振り返りとなり、また、学生の学習到達度を基に、実習や講義・演習の内容について検討することができると考えられる。

2. OSCE の運用

学生からは、説明会の時期や内容、実施時期、練習環境についての改善が必要との回答が多かった。また、教員からは、学生と同様に実施時期と、次いで評価項目とその基準についての改善が必要との回答が多かった。今回のトライアル OSCE では3年次臨地実習前というタイミングで実施した。そのため、定期試験終了後から臨地実習が開始されるまでの短期間で実施となり、学習や技術練習に十分に取れなかったと考える。今後は2年次や4年次での実施も視野に入れ、実施時期について十分に検討することが必要である。

教員の評価項目や評価基準については、「適切でない」と回答したのは約56.3%であった。OSCE 実施までに委員が学生役となり、SP と合同で OSCE のシミュレーションを2回実施した。そこでは実際に評価表に記載をして練習を行った。しかしスケジュール上、参加できなかった教員もいた。また、試験中の想定外の学生からの反応や教員間での評価にばらつきが生じた。評価項目や評価基準の再考とともに、各教員の理解を促すためには、評価者となる教員が全員参加できるように説明や練習の時間と回数を増やすなどの課題が明らかとなった。

VI. まとめ

トライアル OSCE を実施したことによって、学生、SP および教員には、それぞれの立場において効果を得ることができた。しかし、開催時期や練習環境、評価項目、評価基準については、今回のトライアル OSCE を基盤として、さらなる改善が必要である。

本研究は令和元年度教育研究活性化事業に採択され、助成を受けて取り組んだものである。

VII. 引用文献

- 1) 大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会 (2019) : 看護学教育モデル・コア・カリキュラム
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf
- 2) 厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」
<https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-att/2r9852000001314m.pdf>
- 3) 中山洋子, 工藤真由美, 石原昌, 他 (2010) : 平成18年度~21年度科学研究費補助金 (基盤研究 (A) 研究代表者中山洋子) 看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究 - 臨床経験1年目から5年目までの看護系大学卒業看護師の実践能力に関する横断的調査研究報告書
- 4) 伴信太郎 (2003) : 客観的臨床能力試験 - 臨床能力の新しい評価法 - . 医学教育 . 26 (3) . 157-162.
- 5) 笹本美佐他 (2012) : 実習前 OSCE を通して看護学生が実感した学習効果, 日本赤十字広島看護大学紀要, 16, 67-76.